

陳玉璽、もう一つの物語

渡邊澄子（会員）

陳玉璽事件、本誌5月号掲載文の誤り

本誌5月号掲載文「人権侵害・憲法違反の入管」は、人権侵害・憲法違反の見易い事例として入管問題を、今なお係争中（あろうことか、不起訴になったが遺族や支援者は納得せず係争中）のウイシユマさん事件を視野におさめながら、陳玉璽事件によって問題の根を探ろうとしたものだった。陳玉璽事件について得られた資料に、「特在」の証明書を貰うだけと気軽に、私物を宿舍の「善隣会館」（正しくは「善隣学生会館」）の後楽寮においたまま何も持たずに出頭したところ、いきなり

暴力的に手錠をかけられて、翌朝はやく強制送還された理不尽さを書いたが、陳玉璽関連資料の記述を確かめもせず、書いてしまった。ここを書いたとき、新橋の善隣会館に留学生用の宿舍が一九六八年にはあったのだろうかという疑念がよぎったが、この時代なら小室のいくつかがあったかもしれないと思っ、てしまったのだった。会員の方から、あり得ぬとのご指摘をいただき、研究者として許されぬ不注意だったと、驚き慌てて調べてみた。

川田泰代の『良心の囚人』（一九七二年七月、亜紀書房）が詳しいが陳玉璽がアメリカにおける経済学では屈指といわれるブラウン大学の博士課程への奨学生試験にパスして、その大学か

らの身分証明書と学費給付のアメリカ合衆国国務省からの証明書を添付して申請した留学継続願いを国府は却下し、ただちの帰国命令に危険を感じて日本に來たのは一九六七年八月だった。法政大学大学院博士課程への進学が決まり、身元引受人は弁護士宮崎竜介、法政大学経営学部長（当時）松岡教授で、入管当局の要請に従って両者の添書を添えて在留資格更新のため、特別在留許可申請在留資格更新に必要な書類を、東京入管事務所に提出したのは六八年一月八日だった。入管から呼出しによる審査一課で面接を受け、入管当局の指示による、「特在」のための身元保証金一〇万円も納付した。仮放免の決定が出て、あとは「特在」の証明を貰

うだけだったのに、いきなり暴力的に強制送還されたのだった。置きっぱなしの私物のおかれた宿舎はどこだったのか。

宿舎の特定調査を始めた私は、新橋に拠点を持つ「国際善隣協会」と「日中友好会館」は密接する組織だろうと思いついて問い合わせたところ、両者は関係のない別組織であると言われた。

「国際善隣協会」の「協会のあゆみ」によると、一九四二年二月、社団法人「満洲交友会」として設立され、四七年七月、「国際善隣倶楽部」として出発し、機関誌『善隣』を持ち、善隣友好活動を展開している。新橋の現在地への事務所開設は六五年からで、「社団法人国際善隣協会」改称は七二年五月からであった。一方、日中友好会館の「会館のあゆみ」では、傀儡政権満洲国から派遣された留学生の宿舎だった「満洲会館」が一九五三年に「財団法人善隣学生会館」として設立され、六二年四月に後楽寮が開設されている。八三年にここが「日中友好会館」になっている。小石川後楽園に隣接した場所

である。陳玉璽は一九六二年四月開設の後楽寮の五期生だったと思われる。

機関誌『善隣』を持つ「国際善隣倶楽部」が既にあつて活動していたのになぜ、「善隣」を冠した「財団法人善隣学生会館」が設立されたのか、この紛らわしさに問題の根があったのだと合点したが、その後送られてきた「後楽寮沿革」には、「一九三五年八月（財）満洲国留日学生会館、一九三五年九月（財）善隣学生会館、一九四六年に国際学友会が留学生受入諸団体を統合して十一月（財）国際学友会の寮として後楽寮開設、一九五三年五月（財）善隣学生会館 後楽寮（後略）」とあつて、「善隣」の使用は現日中友好会館の前身の方が早かったことになり、訳が分からなくなった。ともかくも、よく調べずに無責任に書いてしまったことを深く反省し、『善隣』の読者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

それにしても、「善隣学生会館」の「後楽寮」の入寮者に関わる大事件が、「善隣学生会館史」に刻印されていない

いばかりか、会館の誰一人知らないのは、戦前回帰志向の政権に危機感が増幅される昨今にあつて、この歴史認識は問題だろう。その後、当時の後楽寮住人の中国人が健在であることを知った。曲折を経た後、やっとメール通信ができて、「私の古い想い出を呼び戻し、懐かしく思います。私は一九四六年から一九八四年まで後楽寮に住んでいました。お尋ねのことに、全部関わりました。機会があつたら、詳しく説明したいと思います」との返事を得た。雀躍したが、対面実現にはなお時間がかかったが、お会いできたこの方（韓慶愈さん）からは、「全部に関わった」とあつたのに、陳玉璽、陳玉璽事件についての期待した新情報は乏しく、得られた代価は、戦前・戦後の波乱の人生を日本で生き抜いてきた中国人の「生の軌跡」だった。ここには生々しい昭和史の一断面が見られる。

韓慶愈、在日八十年の軌跡

韓慶愈は一九二六年の旧暦の二月七

日、新暦では三月二〇日生まれだが、なぜか、彼は生年月日を旧暦で通している。現在九十六歳である。経歴も知らぬ未知の方のお宅へのいきなりの訪問はご迷惑と思われて、最寄りの駅周辺の店でとの私の提案に「ウチに来て欲しい」と言われた。五時間になんなんとする長時間を、一杯の茶もなしに話し続けられた饗饒かきうさではあったが、インタビュの途中でトイレに立たれたとき、介添えなしには一步二歩も無理で、こんなだからウチにと言った、と笑いながらのつぶやきが印象的だった。彼の住むマンションの手前に芭蕉の『奥の細道』の旅の始まりの場所があった、川に沿った細い道が『奥の細道』に因んだ俳句の散歩道になっていて、思い設けぬ僥倖のおまけつきの訪問となった。

氏の生地は中国東北の、遼寧省蓋州市で、家は貧しかったという。小学校未就学が常態で母は読み書きができなかったが、父は小学校卒の少数者のひとりだった。五人姉弟妹の二番目だった。満洲国建国から三年目の一九三五

年に二年遅れの九歳で小学校に入り、四一年、難関のハルピン第一国民高等学校に入学、四三年、満洲国に選ばれたの派遣で日本に留学し、茨城県の太田中学校に入学した。満洲で二年まで行っていたので三年編入も可能だったがそれでは大学には行けぬと言われて一年からのやり直しを選んだ。四五年八月はじめ、日本の敗色濃厚で帰国を命じられて途についたが船中でソ連の対日宣戦を知る。ソ連の制空権に入っていて先に進めず、原爆投下もあったことで船はウロウロしたあげく、日本に逆戻って舞鶴で上陸させられたものの食べ物がない。食料を求めて空襲のなかった京都に行くが京都でも食料は求められず東京へ。満洲大使館で仙台なら食料があると言われて行ったがとんでもなかった。満洲からの留学生の宿舎がこの地にあつてそこに泊まったが傀儡政権だった満洲は崩壊し、満洲大使館は解散となった。この時、大使館は派遣留學生に生活費として一四五〇円くれた。盛岡では三〇〇円で家が建つ時代だったが、日本に居続けるつ

もりはなく、帰国の船便を待っていたので、北海道に行つて温泉巡りなどで派手に遊んで浪費したが、使い切れる額ではなかった。北海道では強制連行された中国人が三万人もいて、彼等が解放されて帰国の船を待つ間、韓慶愈たちに作ってくれた餃子や饅頭のおいしかったことは今に忘れられない。帰国の船を待つ間、盛岡に戻り、あちこちで遊んだが、盛岡では帰国船の発着情報が得られず、無為に過ごすばかりなので東京に戻った。帰国できぬまま、満洲会館が後楽寮となった宿舎に住み、代表者となって日本政府や進駐軍との交渉に当たった。韓たちは、日本政府に対して後楽寮は中国の財産で所有権は中国にあると主張して退かなかつたため、裁判にかけられて学生会館を追い出されたが、身体を張つて居座り続け、中国国旗を立てて日本外務省を包圍して闘った。四六年、中国政府が中華学友会館と名づけて所有権を主張したが日本外務省は認めようとしなかった。韓慶愈たちは外務省の文化交流課に何度もおしかけて所有権を主張し続

けて勝った。

四六年、それまでの呼称「支那」を「中国」と最初に書き換えたのは『読売新聞』だったが、次官通達で「支那」使用は禁止になった。この年の二月、新円切り替えで、満洲大使館から貰った一四五〇円の使い切れなかった多額の金は紙くずになってしまった。こんなことなら家を建てておけばよかったと後悔したが後の祭りだった。中華人民共和国成立は四九年一〇月一日だった。中国は目まぐるしく変転した。韓慶愈は生活の為に『国際新聞』の記者となった。社会への出発はジャーナリストだった。国民党担当記者として党とのパイプ役をつとめていたが、政治思想的には中国共産党支持だった。受験勉強は続けていて、東京工業大学に入学して建築科を卒業した。華僑に中国語を教える講座の講師をバイトとしていて、聴講生として参加していた日本人の伊東美津と親しみ、五一年に結婚した。日中友好の交流が盛んになり、通訳として忙しくなるがその前の一九五三年、華僑の学生組織「中国留日同

学總會」の主席になり、華僑の帰国願望実現に力を尽くした。国民党の支配下にあった葫蘆島（私も参加した「国際善隣協会」の訪中旅行で「葫蘆島」を知った。引き揚げ体験者の会員の方々の感無量ぶりに感慨を深めた）からの引き揚げは中断されていたが、五三年三月、引き揚げ業務が再開され、残留日本人を乗せた興安丸が舞鶴に入港し、高砂丸と共に中国人の帰国が進むことになった。五一年、対日講和条約、五二年、台湾の蒋介石政府と日華平和条約が調印されていたが台湾の圧力もあって帰国運動はスムーズに進まなかった。韓慶愈たちの組織した「帰国運動」の闘いが効を奏して舞鶴までの専用列車が用意された。韓は第三次の興安丸で帰国するつもりで、この第二次の帰国者に舞鶴まで同行し、帰国者の乗船を確保してすぐに帰京して、帰国の準備をする予定だった。ところが帰国者が組織化されていなかったためにいくつもの手続きの面倒を彼等では処理できず、韓は天津まで世話をしながら同行するハメになってしまった。新中国に

なって初めての祖国に降り立った帰国者たちは盛んな歓迎を受けた。この集会には密かに対日政策の責任者で、僑務委員会副主任という重要な地位の廖承志が来ていた。韓慶愈が宿泊したのは幹部用クラスの招待所だったがここで出会った廖承志によって、韓慶愈にとって想定外の「滞留八十年」の人生を送ることになろうとはこの時、神ならぬ身の知る由もなかった。

廖承志の炯眼が帰国者の世話を誠実に果たしている韓慶愈の人となりを見抜いたのだろうか。みんなが帰ってしまったら日本にいる華僑の面倒は誰がみるのか、新聞記者だった君に頼むが、中国語の新聞を日本で出して貰いたい、と言われてしまったのだ。新中国の政府の信頼をかちえていたことを知った慶愈は嬉しくて思わず「やってみます」と答えてしまった。その実践が中国語新聞『大地報』創刊だった。『大地報』は一九五四年三月から七〇年一月までの十五年間、在日華僑に情報を提供し続けた。メディア界で頭角を現した慶愈は、続々と来日するようになった文

化・芸術関係者たちの代表団ばかりか政治関係の人たちまでの通訳として忙しく立ち働くようになって、多くの代表者、知名人たちと交流をもつようになってきている。そこで得た人脈の広さもあってか、韓慶愈は起業家としても活躍することになる。

陳玉璽が来日した一九六七年、強制送還された六八年当時、慶愈は新橋にあった「東京華僑総会」の理事だったので、陳玉璽の身許引受人になって面倒をみたと言う。陳は大人しい真面目な青年だったというが、具体的にどう関わったのかは、聞き出せなかった。後寮寮に三十八年間も住んだ理由もはっきりした説明はなく、記憶が消えてしまったのか、知りたいことは素通りされるが多かった。この頃、中国では文化大革命が起きていたが、陳玉璽も韓慶愈も毛沢東支持者だった。韓慶愈は陳玉璽の生活支援のために『大地報』のアルバイトを世話したという。これは重要な証言だった。彼は中国行きを望んでいたとも。陳玉璽を力づくで強制送還した台湾国府は、軍事法廷

で、陳玉璽を政治犯に仕立てる理由として、「ベトナム反戦」から「毛匪」に捏造したのだった。台湾警備総司令部軍事檢察官による起訴状には、反乱組織である中共系の『大地報』で初めは校正をしていたがやがて毛沢東を賞賛する、中共の宣伝の文章を「愛華」というペンネームで書いて、一貫した

犯罪意図をもって非合法の方法で政府を転覆しようとし、実行に着手する段階に至っていた、として死刑判決の正当性を述べている。法廷での陳述で陳玉璽は「愛華」のネームを使ったことなどなく、そんな原稿を書いた覚えもないと述べている。アルバイトに世話したとの慶愈の言は真実だろう。学生アルバイトが原稿を書くことが可能だったのか、台湾国府を激怒させるような原稿を彼が書いたのか、「愛華」というペンネームを使ったのか等々についての私の質問に韓慶愈は否定的だったが記憶ははっきりしないらしかった。陳玉璽救援運動の実相も記憶にないらしく、その頃、『大地報』が文化大革命で紅衛兵の襲撃を受けていた大変

な時期で間もなく解散に追い込まれているので、記憶が定かで無いのもさもありなんと思われる。新事実は、釈放されて以後、陳玉璽が香港の大学で教鞭をとっていたのを、香港に行った韓慶愈が見ているということだった。陳玉璽史には未出の新事実である。陳玉璽は教職に就けていることに満足げだったと、このことに関してははっきりと話してくれた。これが事実なら、アメリカ永住の前の短期間のことだろう。

陳玉璽が不法逮捕されて台湾国府で理不尽な裁判を受けていて、これに抗してアメリカでは官民こぞっての陳玉璽救済運動が火をふいていたが、韓慶愈にとってはそれどころではなかったのも納得できる。その後の日中国交回復過程を韓慶愈は超多忙に生きている。その繁忙な経歴を知ると、今となっては、五十年以上も前の陳玉璽事件の詳細を覚えていないのもそんなものかと思われる。韓慶愈は、北京の学苑出版社から刊行された自著の『留日七十年』を私に献呈してくださって自分（韓慶愈）については『ある華僑の戦後日中

関係史 日中交流のはざまに生きた韓慶愈（大類善啓著）と、『満洲国留日学生の日中関係史 満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』（浜口裕子著）の二冊が参考になると言われた。

五時間余に及んだ長時間のほとんどは、韓慶愈さんのこれまでの生の軌跡の後づけだった。後日、陳玉璽について細かい質問をメールで何度かしたが、「良い友人になってくれて、嬉しい」とのみで、質問のお返事はただけていない。日中の政・財・文化広範に及ぶその分野を代表する人たちと親しく交流する忙しい生活のなかでは、釈放という結果を得た陳玉璽事件は韓慶愈にとって忙しすぎた人生の途中通りすぎの一齣に過ぎなかったのかもしれない。記憶が消えていたとしても責めることなどできはしれないと思うことにした。

ところで、韓慶愈は、主のように後楽寮に長期間住んだ納得できる理由の説明を求めた私を納得させることはなかった。略歴に徴すれば国際新聞記者になったときから和華株式会社社長時

代までと言うことになる。本当だろうか。この間に結婚があり、子も産まれているのだが。

韓慶愈が挙げた二冊のうち韓慶愈叙述の多いのは大類善啓さんの方だろうと付度して、購入した。本が配送されて眺めたとき、この本の著者大類善啓さんとおっしゃる方が、拙論掲載の五月号に「今こそ人類主義を！」を載せられた大類善啓さんであることを知った。驚いた。

韓慶愈さんからいただいた『留日七十年』（来年は「留日八十年」になる）の巻末に付された刊行年の二〇一三年現在の「略歴」には、次のように記されている。

学歴

- 1943年4月 茨城県立太田中学入学
- 1945年8月 茨城県立太田中学3年中退
- 1948年4月 東京工業大学予備部入学
- 1953年3月

東京工業大学建築科卒業

職歴

- 1946年4月～1948年8月 国際新聞社記者
- 1951年4月～1953年9月 中国留日学生同学総会主席
- 1954年3月～1970年1月 中文紙『大地報』社編集
- 1961年6月～1965年5月 旅日華僑青年親睦会主席
- 1966年4月～1987年3月 中国語研修学校講師
- 1970年2月～1990年3月 株式会社向陽社理事長
- 1973年4月～1985年3月 早稲田大学、東京都立大学講師
- 1978年10月～1999年6月 (株)日中科学技術文化センター専務理事
- 1978年10月～1999年6月 日中録画株式会社専務理事
- 1980年8月～1993年3月 和華株式会社社長
- 1999年6月～2007年6月 (株)日中科学技術文化センター理事

長
2007年6月～2008年6月
(株)日中科学技術文化センター特別
顧問
現在(本書刊行時、2013年1月現在)

在日華僑北省同郷連合会常務理事、
東京華僑総会常務理事、(株)日中科学
技術文化センター顧問、黒竜江大学・
大連理工大学城市学院客員教授、哈
爾濱理工大学名誉教授、天津技術大
学名誉教授、常陸太田市政府交流顧
問、東京工業大学同級生団体「蔵前
工業会」会友

早稲田・都立大学講師は「中国語」
の非常勤講師だったとのことである。
帰宅後、いただいた『留日七十年』
の「略歴」を見て、重職の歴任者だっ
たことを知ったのだった。戦中に満洲
国から派遣されて日本留学してから、
お目にかかった今年まで、滞日七十九
年なのだ。中国語のこの本を読めない
のが情けない。傀儡の満洲からの派遣
者だったことで戦後は傀儡の誹りを受

けながら、「瓢箪から駒」的な長期滞
日だったが、在日華僑の代表者として
戦後日本を生き続けてきたのだった。
その行程、軌跡が大類さんの著書には
詳述されている。何も知らずに訪問し
て、無遠慮に質問を重ねたことが恥じ
られた。韓さんは、廖承志の信任から
中国語の新聞『大地報』を創刊した翌
年の一九五五年の中国貿易代表団の来
日に通訳を務めたのを初めとして、そ
の後の京劇団(梅蘭芳)、巴金ら作家
代表団(川端康成ら日本の作家達と交
流の席にも)、映画・文化・曲技(雑
技)・中国芸術などの団体来日が盛ん
になった頃だが、そこには通訳として
存在感を示す韓慶愈の姿がある。広東
省友好代表団来日時には宮本顕治の歓
迎宴にも通訳として参加している。文
化・芸術のみならず政治の中枢にまで
信頼されていた方と知って、ますます、
訪問時の無礼が省みられた。

ところで、大類さんのこの著書によ
ると、大類さんと韓さんの出会いは、
『大地報』の解散、廃刊後に韓さんが
起業した『大地報』を継いだ「向陽社」

に大類さんが就職したことによるとい
う。当初は社長と社員だったことにな
る。本書執筆は、お二人がそれぞれの
人生を閲した後の二〇〇五年、大類さ
んがお仲間と立ち上げた「方正の会」
の顧問として迎えた韓慶愈さんの創立
総会での挨拶への感動が、親交の再開
に結びついて伝記を書くことになった
らしい。韓慶愈さんの生涯はまさに激
動・波乱の昭和史の体現者と言えるだ
ろう。

大類本における陳玉璽事件に関わる
とおぼしき叙述は、「台湾出身で入管
法違反に絡み横浜入国管理事務所に収
容された男がいた。台湾人の彼は本省
人だったが、大陸を支持し、中国大使
館に連絡してきた。大使館はすぐに韓
に電話をしてきた。韓はそれではと彼
の身元を引き受け、彼は解放され向陽
社に入社した」というくだりと思われ
る。

韓さんが私に話してくれたことは陳
玉璽の身元引受人になったことと、生
活の資として『大地報』のアルバイト

に世話したこと、事件後、香港で教職についていた陳玉璽に会っていることだった。一九六八年二月八日、陳玉璽

が後楽寮から入管事務所に「特在」証明を貰うために出頭していきなり手錠をかけられ、横浜市三溪園の山上にあった収容所に送られたので「横浜入国管理事務所」の記述は正しいが、一九七〇年設立の向陽社入社はあり得ない。また、陳玉璽は入管法違反もしていない。大量の台湾の麻薬犯の長期収容に業を煮やした日本政府が、麻薬犯を台湾に引き取ってもらうために、麻薬犯三〇人に政治犯一人の密約を交わし、麻薬犯を早く国外追放をしたいため、政治犯第一号として陳玉璽がでっちあげられたのだった。陳玉璽は入管法違反者ではなく酷烈な犠牲者なのだ。

件だったとみえて、大類さんに話したのだろうと思うが事実と相違していて、記憶は定かではなくなっている。

陳玉璽事件史では、宮崎竜介が身元引受人になっている。証明できる書類が幾つもある。一九四六年のまだ多分「後楽寮」にはなっていないかった満洲国派遣の留学生宿舍と思われる「満洲会館」時代からここに住んでいて、責任者になっていた韓さんが、新入の陳玉璽の身元引受人になったということは納得できる。横浜の入管に収容も事実はだが、記憶は曖昧、錯綜していたらしい。韓さんとのインタビューで得た新ニュースは、陳玉璽事件史にはこれまで記述のなかった、事件後、香港の大学で教鞭を執っていた陳玉璽に韓さんが会われているということである。これまでの記述では、釈放後、帰った台湾では快く迎え入れられなかったの

の中心的役割を果たした川田泰代が七十一歳の誕生日をニューヨーク・クイーンズ区の陳玉璽の家で迎えたこと、二人の子が父の命の恩人に「ハッピーバースデー」を歌ってくれたことを後日談として川田が書いている。

「善隣協会」と「善隣学生会館」は別組織で、無関係だったことを知らず、紛らわしさに騙されて調査不足のまま誤った記述をしてしまったことを、ここに改めて訂正し、お詫びしたい。

誤りの検証過程で、本会員の方にも、葫蘆島から引き揚げてこられた方がおいでになるが、満洲国を出自として、波乱の戦前戦後をたくましく生きてきた、留日七十九年という方に会えて、昭和史のリアルに接し得たのは、得がたい僥倖だった。

苦節の留日八十年の中国人物語としてお届けすることを許していただきたい。